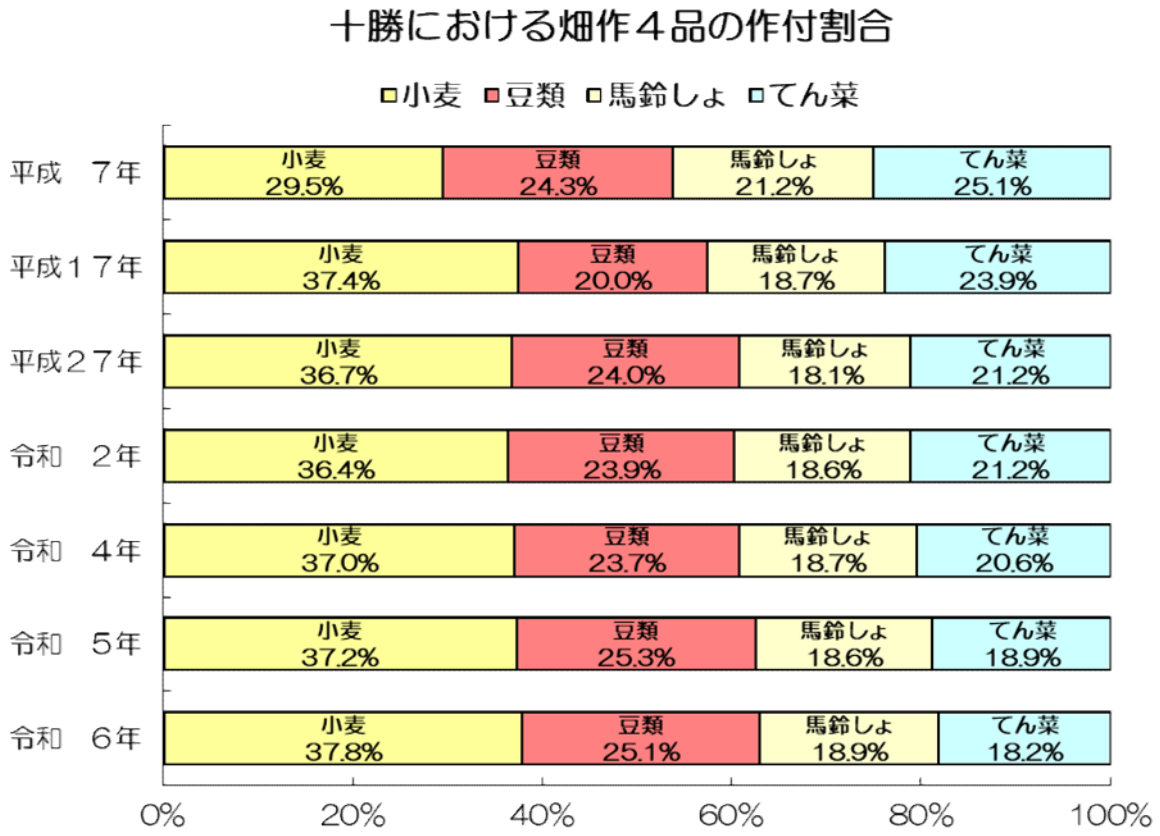
8　農業生産の概要（農産）

8-1　農　産

畑　作

　管内では、小麦、豆類、馬鈴しょ、てん菜の４品を中心とした大規模な畑作経営が展開されている。
　近年、経営規模の拡大が進む一方、高齢化、労働力不足などの問題や収益性の面などから、特定の作物の作付偏重による輪作体系の乱れが見られるが、連作障害の防止や実需者からの安定供給の要望に応えるためにも、適正な輪作体系を維持することが必要である。



（ 農林水産省「作物統計」。ただし豆類（大豆除く）は平成27年は農林水産省「特定作物統計調査」、令和２年以降は十勝総合振興局調べ）

8　農業生産の概要（農産）

（1）小　麦

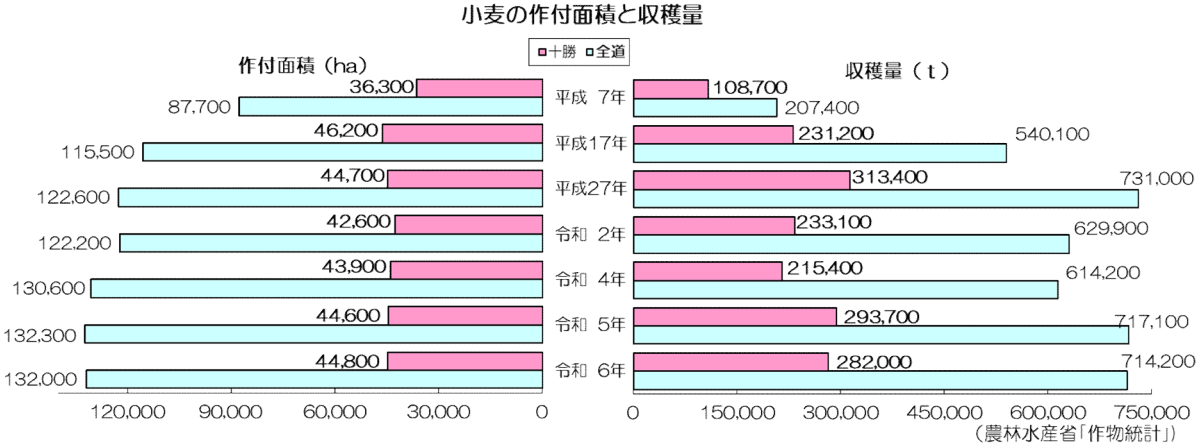
令和６年産の小麦の作付面積は、前年に比べ200ha増加し、4万4,800haとなった。10a当たり収量は630kgと前年産に比べ減少し、収穫量は28万2,000tとなった。

管内で栽培されている小麦は、秋まき小麦（うどん向け中力系品種）がほぼ100%を占めており、品種は、23年産より従来のホクシンからきたほなみに全面切替となった。

一方で実需者からはパン用小麦生産の要望があり、春まき小麦（パン用向け強力系品種）も1,030haほど栽培されている。

また、24年産からは、中力系品種とのブレンドで優れたパン適性を発揮する超強力系品種ゆめちからも栽培されている。

なお、十勝産秋まき小麦は、各農協等で乾燥、調製された後、主に道外向けは広尾町十勝港にある十勝港広域小麦流通センターのサイロに運ばれ貯蔵されており、都府県への輸送にはバラ積貨物船が使用されている。



（農林水産省「作物統計」）

（2）豆　類

令和6年産の豆類作付面積は、大豆、小豆、いんげん合わせて2万9,790haとなった。

本道に占める管内の作付割合は大豆28%、小豆62%、いんげん76%を占めており、道内の豆類生産の41%が十勝管内で生産されている。

令和6年産の収穫量は7万8,833tとなった。

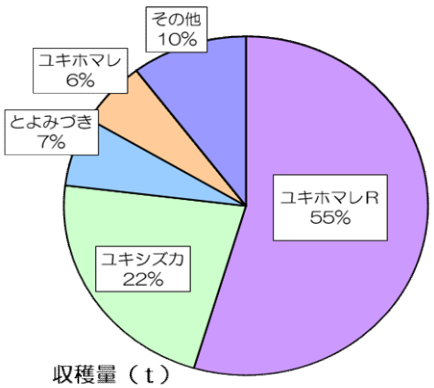
（平成１７年以前の数値は農林水産省「作物統計」、平成２７年は農林水産省「特定作物統計調査」、令和２年以降は十勝総合振興局調べ）

8　農業生産の概要（農産）

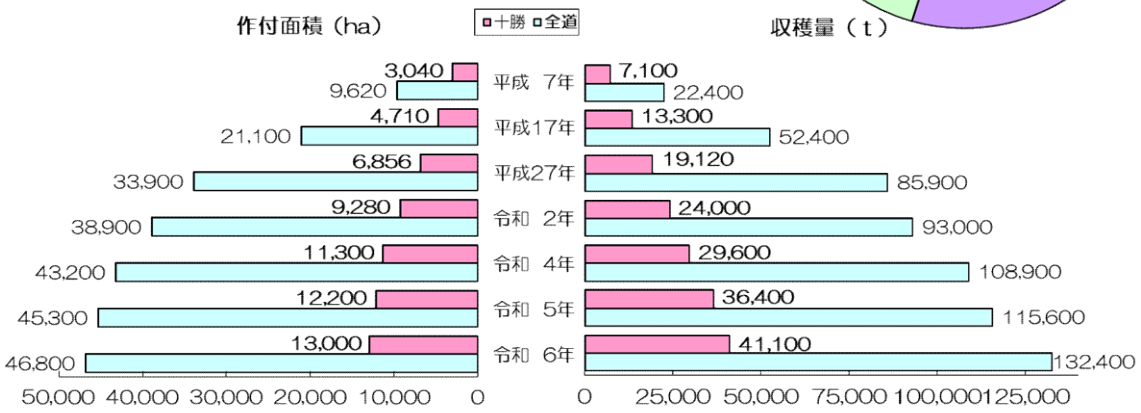
○大　豆

　令和６年産の大豆の作付面積は、前年に比べ800ha増加し13,000haとなった。
　10a当たり収量は316kgと前年に比べ増加し、収穫量は4万1,100tとなった。
　品種別の作付割合はユキホマレR、ユキシズカ、とよみづき、ユキホマレで約9割を占めている。

大豆の主要な品種作付割合（令和6年）



大豆の作付面積と収穫量

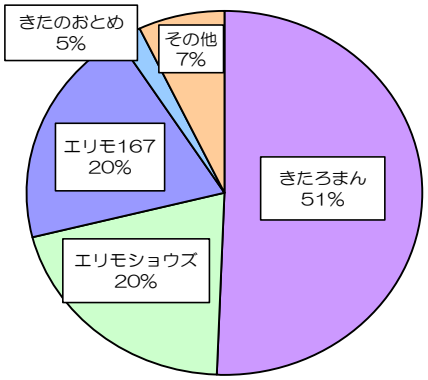


（農林水産省「作物統計」）

○小　豆

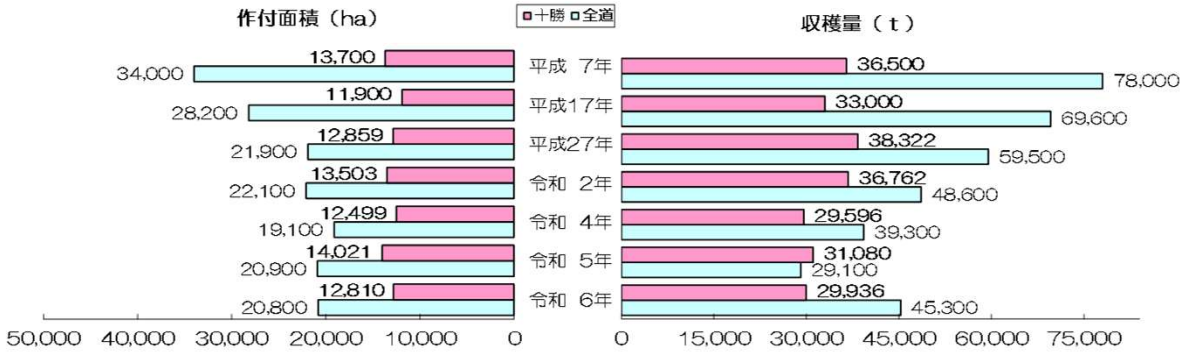
　令和6年産の小豆の作付面積は前年に比べ1,211ha減の１万2,810haとなった。
　10a当たり収量は234kgと前年に比べ増加し、収穫量は2万9,936tとなった。
　品種別の作付割合は、きたろまんが5割以上を占め、エリモショウズ、エリモ167、きたのおとめと続いている。
　十勝産小豆は品質が良いことから、和菓子の原料として用いられることが多く、このほかには、汁粉、ぜんざい、赤飯での消費も多い。

小豆の主要な品種作付割合（令和6年）



（十勝総合振興局調べ）

小豆の作付面積と収穫量



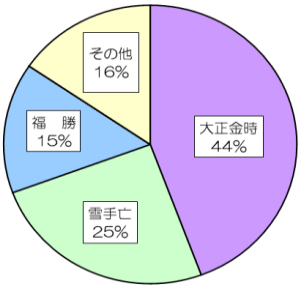
（平成１７年以前の数値は農林水産省「作物統計」、平成２７年は農林水産省「特定作物統計調査」
※　令和２年以降の十勝の数字は道調べのため、全道の内数となっていない場合がある）

8　農業生産の概要（農産）

○ いんげん

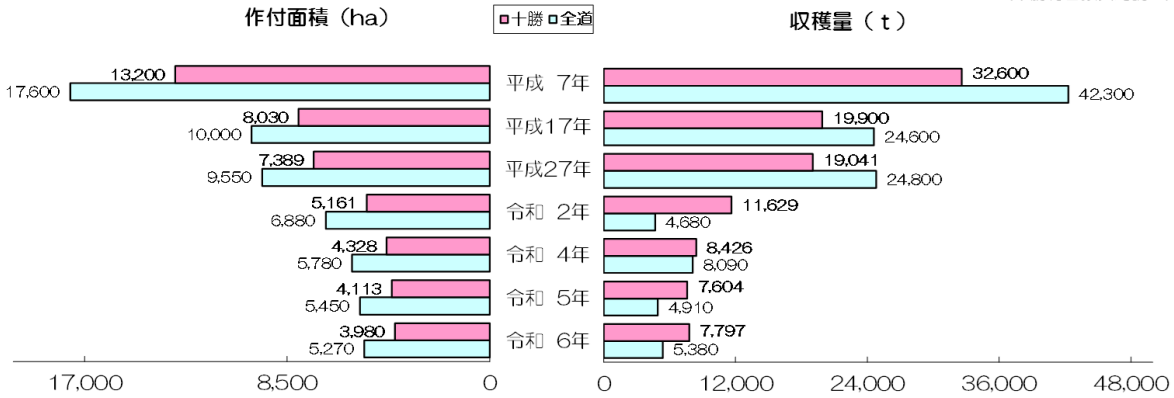
令和６年産のいんげんの作付面積は前年に比べ133ha減少し3,980haとなった。
10a当たり収量は196kgと前年に比べ増加し、収穫量は7,797tとなった。
品種別の作付割合は、大正金時、雪手亡、福勝の３品種で８割以上を占めている。
金時は主に煮豆、手亡類は白餡に利用されている。

いんげんの主要な品種作付割合（令和6年）



いんげんの作付面積と収穫量

（十勝総合振興局調べ）

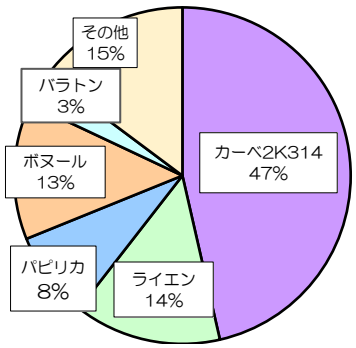


（平成１７年以前の数値は農林水産省「作物統計」、平成２７年は農林水産省「特定作物統計調査」
※　令和２年以降の十勝の数字は道調べのため、全道の内数となっていない場合がある）

（3）てん菜

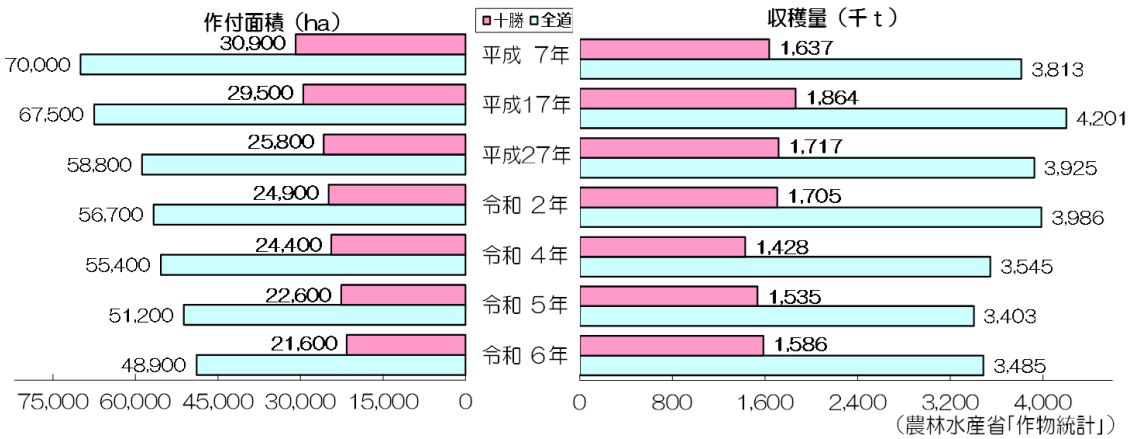
令和6年産のてん菜の作付面積は、前年に比べ1,000ha減少し、２万1,600haとなった。
10a当たり収量は7,350kgと前年に比べ増加したため、収穫量も前年より増加し158万6,000tとなった。
てん菜糖は家庭用として使用されるほか、菓子類の原料として用いられている。

てん菜の主要な品種作付割合（令和６年）



（てん菜糖業年鑑２０２５）

てん菜の作付面積と収穫量



（農林水産省「作物統計」）

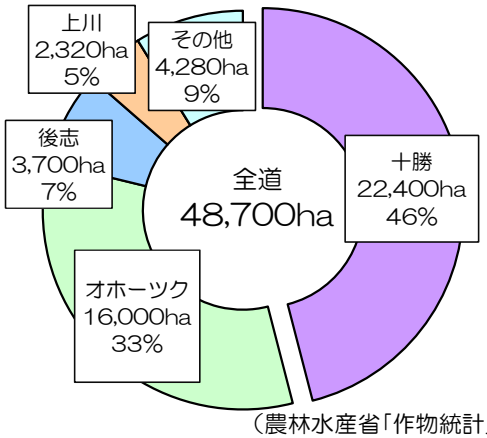
8　農業生産の概要（農産）

（4）馬鈴しょ

令和６年産の馬鈴しょの作付面積は、前年より100ha増加し、2万2,400ha、単収は前年に比べ減少し、3,830kgとなった。収穫量は85万8,700tとなり、全道に占める割合は、作付面積で46%、収穫量で46%と、ともに全道一位となっている。

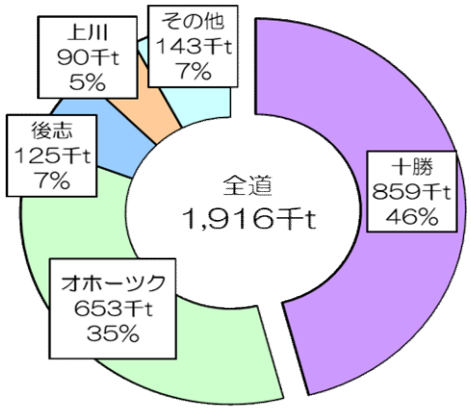
また、令和５年産の管内の用途別作付割合は、生食用25%、加工食品用45%、でん粉原料用21%、種子用９%で、主な品種は、コナヒメ（でん粉原料用）21%、トヨシロ（加工食品用）16%、きたひめ（加工食品用）10%、男爵薯（生食用）10%となっている。

振興局別馬鈴しょの作付面積（令和６年産）



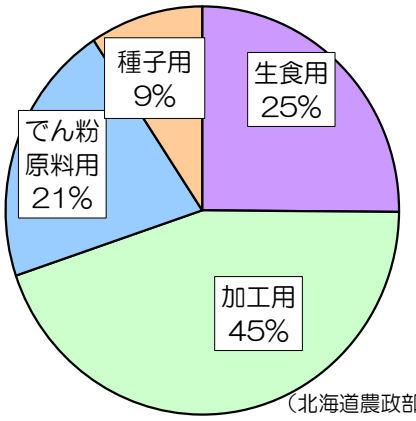
（農林水産省「作物統計」）

振興局別馬鈴しょの収穫量（令和６年産）



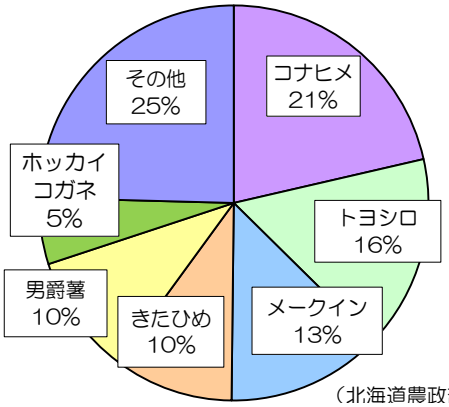
（農林水産省「作物統計」）

十勝管内馬鈴しょの用途別作付割合（令和5年産）



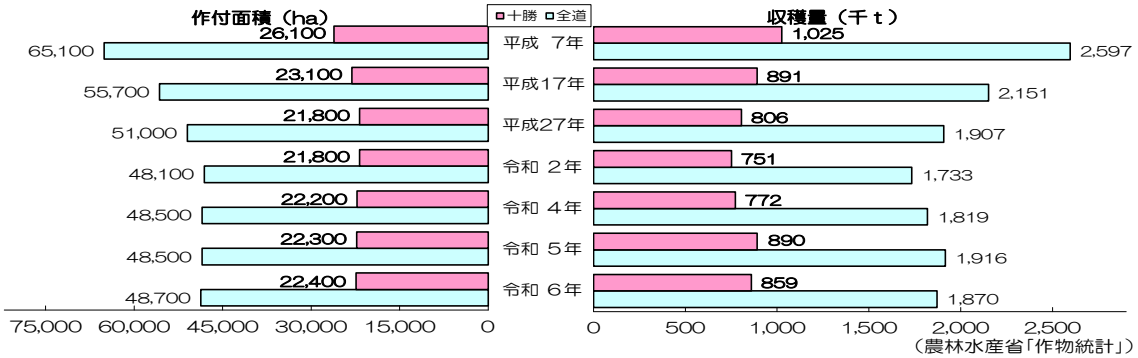
（北海道農政部調べ）

十勝管内馬鈴しょの品種別作付割合（令和5年産）



（北海道農政部調べ）

馬鈴しょの作付面積と収穫量



（農林水産省「作物統計」）

８　農業生産の概要（農産）

（５）野　菜

令和６年産の主な野菜（３２品目）の作付面積は9,395.8haで、露地野菜を中心に栽培されている。主な品目ではスイートコーンが2,474ha、にんじんが1,393ha、ながいもが1,237ha、えだまめが1,039haとなっており、これら4品目で全体の約７割を占めている。

また、生産者の所得向上のため、畑作４品に加え野菜を取り入れている地域もあり、ＪＡ中札内村及びＪＡ芽室町のえだまめ、ＪＡ帯広かわにしのながいも、ＪＡ音更町のにんじんなどが有名であるほか、近年はさつまいもの生産に取り組む地域もある。

＜生産動向＞

・根菜類（令和５年産から調査品目にさつまいもが追加）

令和６年産の主な根菜類の作付面積は、前年より約70ha減少した。

１０ａ当たり収量はにんじん、かぶで前年を上回った。

・葉茎菜類

令和６年産の主な葉茎類の作付面積は、前年より約８ha減少した。

１０ａ当たり収量は、たまねぎ、はくさい、キャベツ、ほうれんそう、ゆりね、にんにくで上回った。

・果菜類

令和６年産の主な果菜類の作付面積は、前年より約164ha減少した。

１０ａ当たり収量は、きゅうり、えだまめ、スイートコーン、さやえんどうで前年を上回った。

（６）果　樹

管内は、厳しい気象条件であることから、果樹栽培には向かない地域とされてきていたが、近年の温暖化の影響などにより徐々に栽培する環境が整えられてきている。

その中で池田町では、早くから地域の気候・風土に合った品種の開発や栽培方法の改良に取り組み、醸造用ぶどうが栽培されている。

最近では、池田町以外でも個人が自ら醸造用ぶどうを栽培する動きが活発化し、2019年８月には管内で56年ぶりとなる２か所目のワイナリーが帯広市に、2020年１０月には芽室町に３か所目、2021年9月には池田町に４か所目、2025年４月には音更町に５か所目のワイナリーが開設されている。

また、バイオマスエネルギー等を活用した果樹栽培など地域独自の取組も増えてきている。

8　農業生産の概要（農産）

（7）花　き

管内では大規模土地利用型農業が展開されているため、花き栽培はあまり盛んに行われていないが、小規模ながら切花や花壇用苗物等が栽培されている。

＜主な品目＞
【切 花】
カーネーション、トルコギキョウ、カラー、ヒマワリ、ユリなど

【花壇用苗物】
アリッサム、ビオラ、マリーゴールド、パンジー、サルビアなど

＜北海道花の日の取組＞

「北海道花きの振興に関する条例」は、道民の皆さんに「北海道の花」を知り親しんでいただくことを目的として令和２年に制定されました。

今後の花き消費を担うこどもたちに対して、北海道産花きの展示や提供、フラワーアレンジメント制作体験などの「花に触れる機会」を早期に創出することで、人々に潤いと安らぎを与え、豊かで健康な暮らしをもたらす北海道産花きに対する関心を深めるとともに、北海道産花きの日常使いの増加やブランドの強化に繋げ、生産現場である地域の活性化を図ることが大切です。

道では「北海道花き利活用促進強化事業」として、北海道花の日（８月７日）にあわせた道産花きの展示や参加型体験教室などの取組を通じて道産花きの魅力をPRすることとしており、令和７年度、十勝総合振興局では音更町産トルコギキョウをはじめとした道産花きを使ったフラワーアレンジメントを振興局庁舎、道の駅おとふけ、JR帯広駅の３箇所に展示しました。

（8）水　稲

かつては管内でも水稲栽培が広く行われていたが、現在は大規模畑作経営が中心で、水稲の作付面積は令和６年産で９haとなっている。うち、うるち米が４ha、もち米が５haで、音更町、新得町、幕別町、池田町で作付けされている。

8　農業生産の概要（畜産）

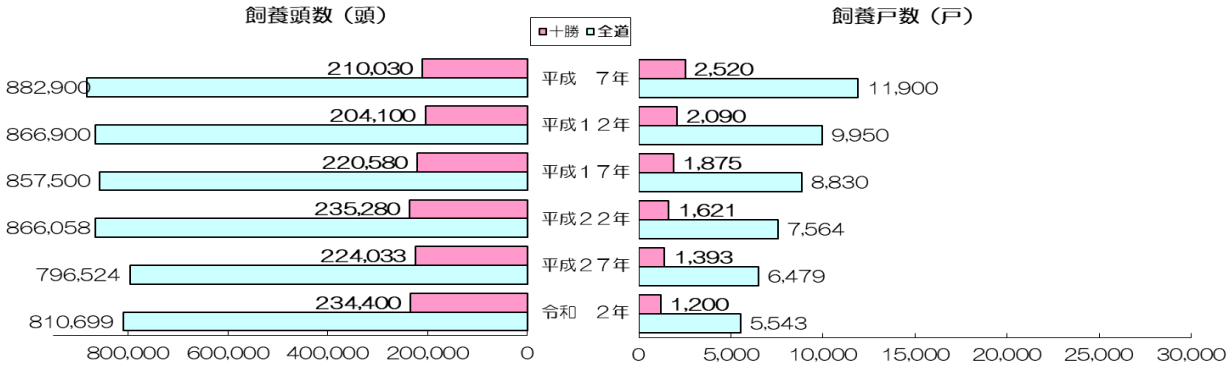
8-2　畜　産

（1）酪　農

酪農は畑作とともに十勝農業を代表する存在であり、乳用牛飼養戸数・飼養頭数、受託乳量ともに全道一を誇っている。

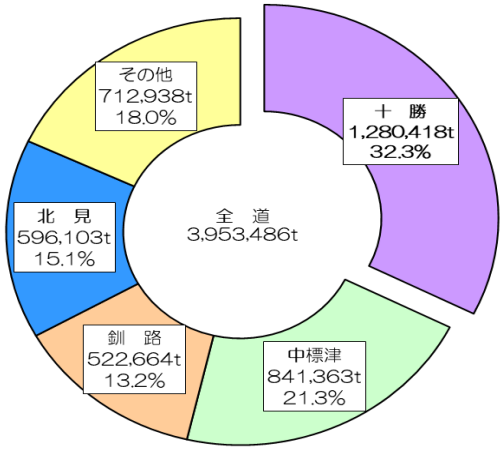
農業者の高齢化等により飼養戸数が年々減少する中、１経営体あたりの飼養頭数は増加している。十勝では、フリーストール牛舎、ミルキングパーラーの導入が盛んであり、いずれも全道一の普及率となっている。また、省力化のための搾乳ロボットの導入もここ数年増加しており、管内では139戸（令和6年2月現在道農政部調べ）で利用されている。

乳用牛の飼養頭数と飼養戸数の推移



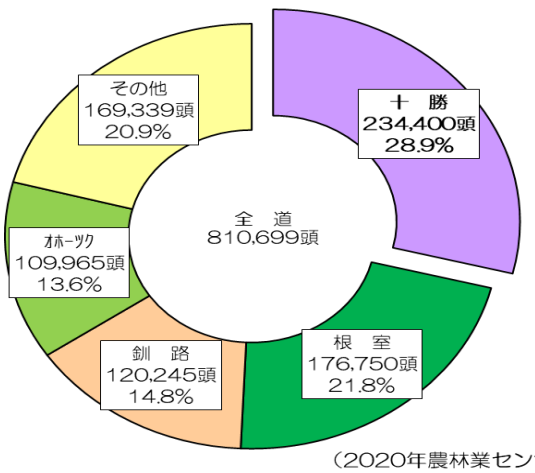
（農林水産省「畜産統計」、平成22年は「2010年世界農林業センサス」、平成27年から「農林業センサス」）

受託乳量（令和6年度）



（ホクレン農業協同組合連合会 受託乳量）

振興局別飼養頭数（令和２年）



（2020年農林業センサス）

8　農業生産の概要（畜産）

（2）肉用牛

肉用牛は、畑作、酪農に次ぐ重要な地位を占めており、飼養戸数及び飼養頭数ともに全道一を誇っている。

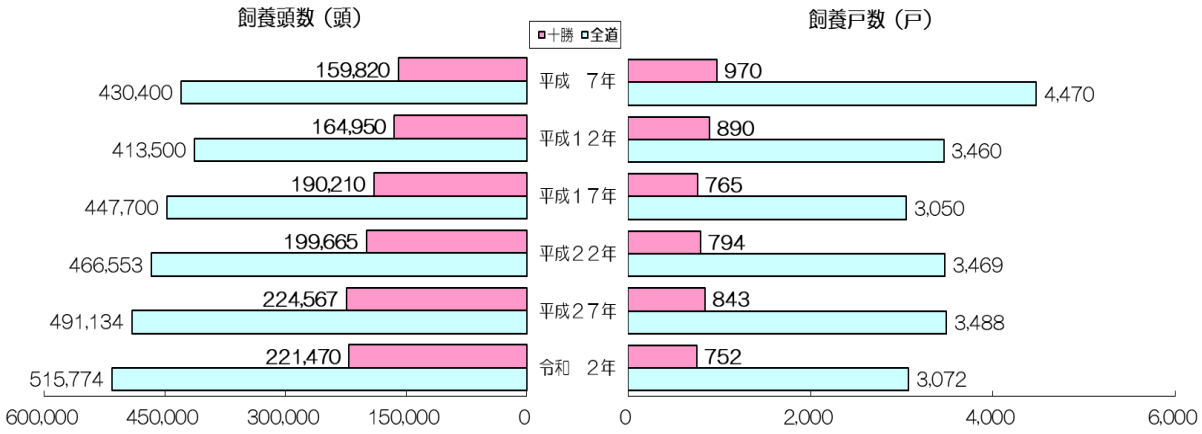
十勝和牛・いけだ牛・十勝若牛をはじめ、地域や団体等で肉用牛のブランド化を進めており、生産現場においては、食の安全・安心はもとより高品質な牛肉の生産が行われている。

令和4年10月に鹿児島県で開催された5年に1度の「第12回全国和牛能力共進会」においては、全道22頭のうち、十勝管内から19頭が全出品区に参加。第４区及び第５区で優等賞３席を獲得し、他の出品区でも前回の宮城大会を上回るなど好成績を残している。

令和9年8月に北海道で開催される次回の「第１３回全国和牛能力共進会」は、音更町及び帯広市での開催が決定しており、十勝和牛をPRする絶好の場として、期待されている。

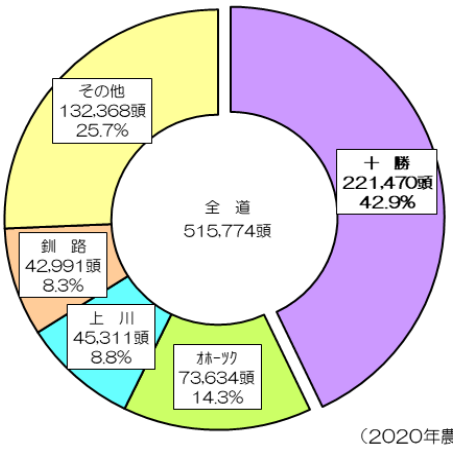
また、管内ではホクレン家畜市場と十勝中央家畜市場が家畜の流通の拠点となっている。

肉用牛の飼養頭数と飼養戸数の推移



（農林水産省「畜産統計調査」、平成22年は「2010年農林業センサス」、平成27年は「2015年農林業センサス」、令和２年は「2020年農林業センサス」）

振興局別飼養頭数（令和２年）



（2020年農林業センサス）

８　農業生産の概要（畜産）

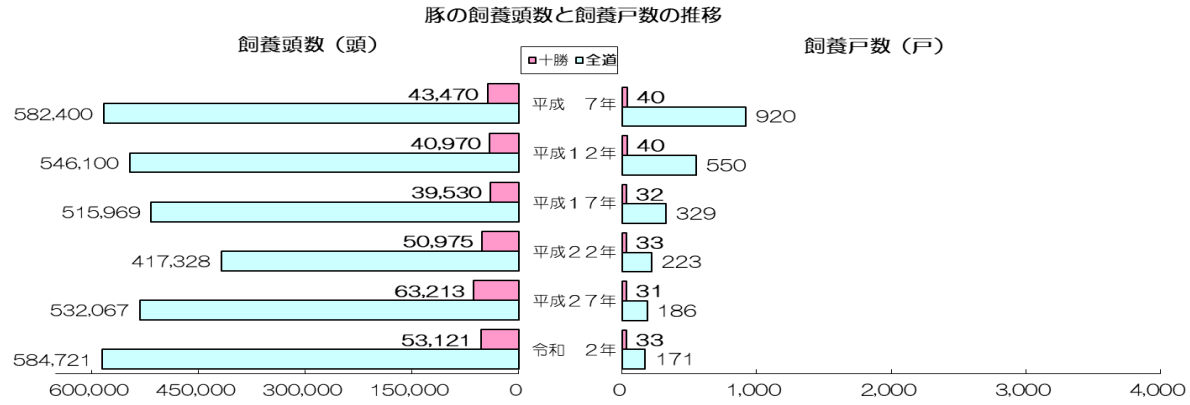
（３）中小家畜

肉豚の飼養戸数は減少傾向、総飼養頭数は増加傾向である。また、最近は、草地で放牧飼養する「放牧養豚」、チーズ製造時に出る水分（ホエー）を与えて育てた「ホエー豚」、モール温泉を飲ませて育てた「モール豚」など地域ブランド化に向けた様々な取組が進められている。

めん羊の飼養頭数は、北海道が全国の約６割を占めており、十勝は全道一となっている。近年は、羊肉の提供だけではなく、羊の毛刈りなどの体験やファームインの開設など消費者との交流に関する取組も行われている。

採卵鶏の飼養戸数は、近年横ばいで推移、飼養羽数は高病原性鳥インフルエンザによる殺処分の影響により、令和６年は大きく減少している。鶏卵は、安全・安心な生産を目指すためにＨＡＣＣＰ方針の導入、道産飼料米の活用などの取組が行われている。

また、肉用鶏は、新得町では、（地独）北海道立総合研究機構が開発した北海地鶏Ⅱを「新得地鶏」と命名し、町の新たな特産品としてブランド化を進めている。



（農林水産省「畜産統計」、平成22年は「2010年農林業センサス」、平成27年は「2015農林業センサス」、令和2年は「2020農林業センサス」）

（４）馬

馬は、高度成長期まで農耕用として大きな役割を占めており、昭和２８年のピーク時には十勝管内で６万3,527頭が飼養されていた。その後、農作業の機械化、運搬手段の変化等によって活躍の場が少なくなり、平成１３年には3,361頭と大幅に減少している。

近年は、ばんえい競馬、馬肉等の需要に対応した改良増殖の促進や技術者、後継者の育成等について、関係団体が取組みを進めている。

8　農業生産の概要（畜産）

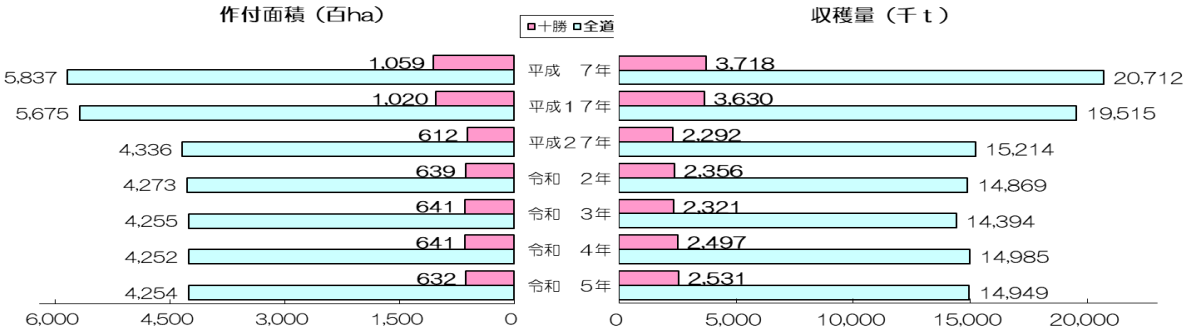
（5） 飼料作物

根釧地域などの草地型酪農地帯と比較して、サイレージ用とうもろこしの作付が多く、畑作地帯の特色を活かした自給飼料確保を図っている。

飼料価格を左右する海外の穀物相場は、今後も不安定な状態で推移することが推測され、配合飼料価格も依然として高止まりの中、飼料自給率の向上対策は、経営への影響を最小限に止める重要な課題となっている。

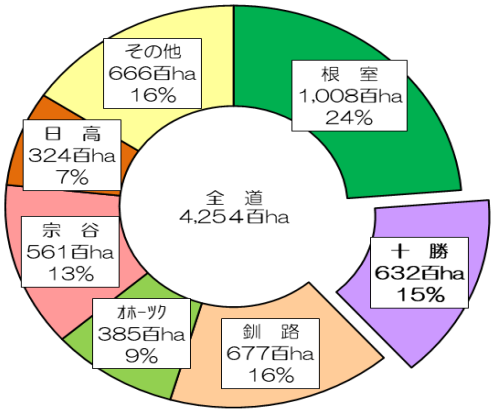
このため、地域の営農支援組織として重要な役割を担っているコントラクターの強化はもとより、最近では、ＴＭＲセンターの取組や集約放牧技術の普及なども進められている。

牧草作付面積と収穫量の推移



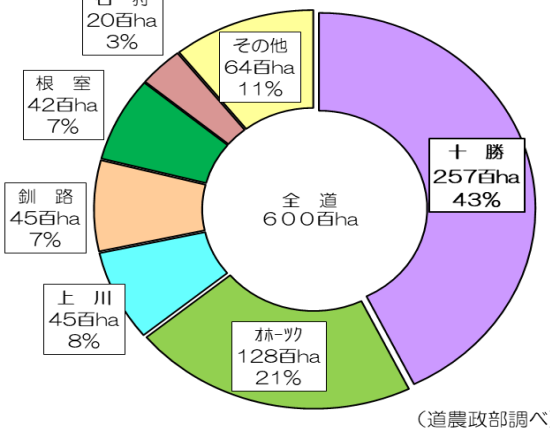
（農林水産省「畜産統計」、平成22年以降は道農政部調べ）

振興局別牧草作付面積（令和５年）



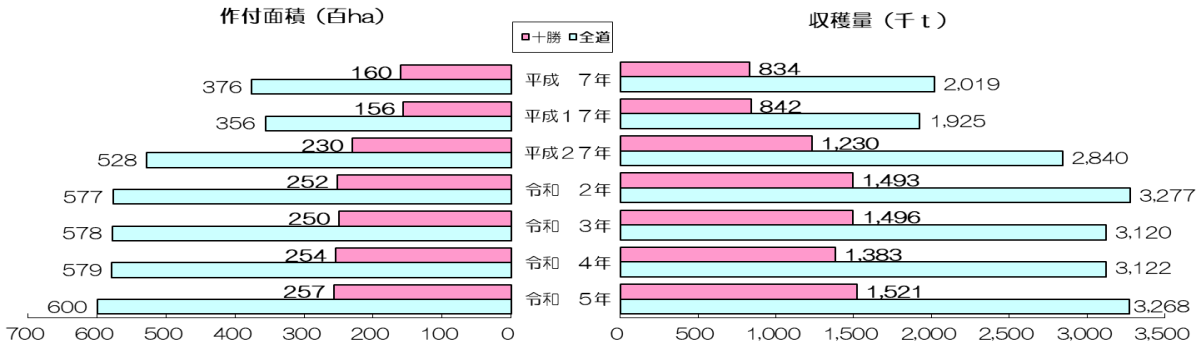
（道農政部調べ）

振興局別サイレージ用とうもろこし作付面積（令和５年）



（道農政部調べ）

サイレージ用とうもろこし作付面積と収穫量の推移



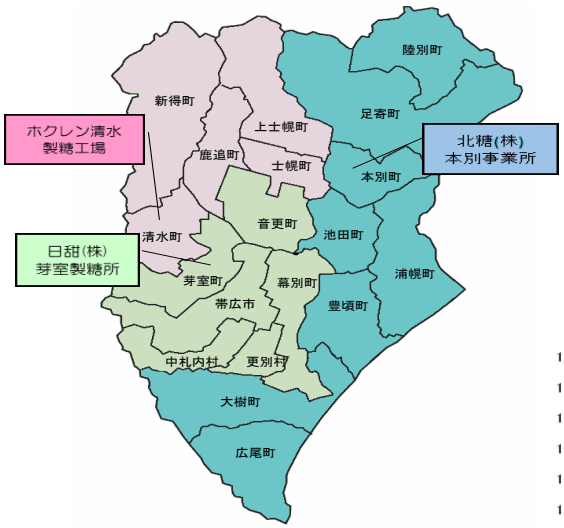
（農林水産省「畜産統計」、平成22年以降は道農政部調べ）

10　農畜産物の加工

10-1　てん菜製糖

　管内には２つの製糖工場と１つの事業所があり、10月上旬から24時間操業で、道内の49%に当たる180万3千ｔのてん菜を処理し、28万ｔの砂糖を生産している。このうち北海道糖業（株）本別製糖所の砂糖生産は、2023年３月で終了した。

製糖工場の位置と原料の集荷区域



工場別原料集荷量と砂糖生産量（令和6年産）

（単位：ｔ、％）

工　場　名	原料処理量t	砂糖生産量t（うち原料糖）	歩留%	截断期間	製糖期間
日本甜菜糖業㈱芽室製糖所	1,189,523	185,900 26,707	15.63	10.5～ 2.23	10.5～ 5.26
ホクレン清水製糖工場	317,105	47,622 4,463	15.02	10.15～ 2.26	10.15～ 2.26
北海道糖業㈱本別事業所	296,853	46,133 0	15.54		
北見転出分	97,529	15,244 0	15.63		
芽室転出（委託）分	199,324	30,889 0	15.50		
合　計	1,803,481	279,655 31,170			

（北海道農政部農産振興課調）

・原料糖：本州の製糖メーカー原料として販売するもの。
・原料糖数量は砂糖生産量の内数である。
・北糖本別事業所で受け入れた原料は、北見製糖所で製糖するほか、日甜芽室製糖所で委託製造している。

工場別原料集荷量と砂糖生産量（令和５年産）

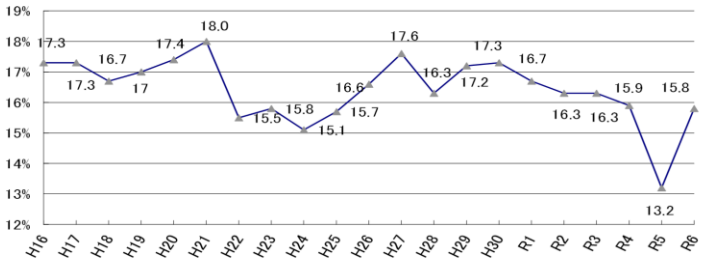
（単位：ｔ、％）

工　場　名	原料処理量t	砂糖生産量t（うち原料糖）	歩留%	截断期間	製糖期間
日本甜菜糖業㈱芽室製糖所	1,145,415	138,491 2,600	12.09	10.5～ 2.23	10.5～ 6.6
ホクレン清水製糖工場	305,340	41,696 671	13.66	10.15～ 2.21	10.15～ 2.21
北海道糖業㈱本別事業所	284,524	34,732 0	12.21		
北見転出分	84,540	10,739 0	12.70		
芽室転出（委託）分	199,983	23,992 0	12.00		
合　計	1,735,279	214,919 3,271			

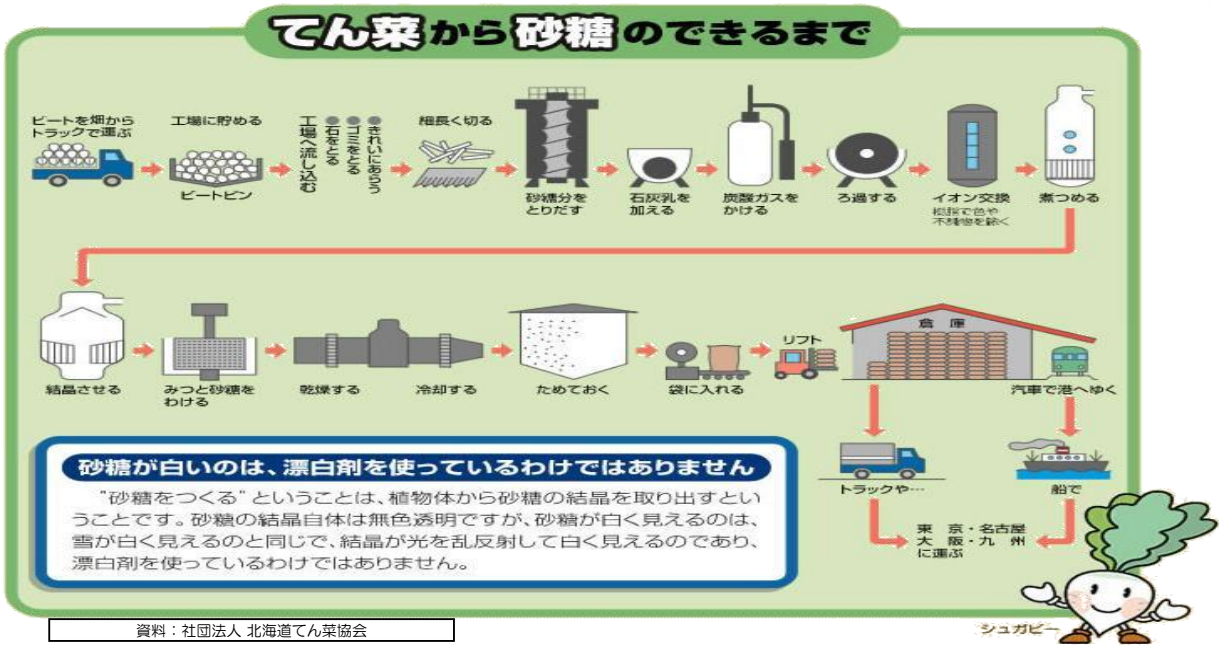
（北海道農政部農産振興課調）

・原料糖：本州の製糖メーカー原料として販売するもの。
・原料糖数量は砂糖生産量の内数である。
・北糖本別事業所で受け入れた原料は、北見製糖所で製糖するほか、日甜芽室製糖所で委託製造している。

十勝管内てん菜の糖分推移



（令和５年産てん菜の生産実績（てん菜糖業年鑑）より）



資料：社団法人 北海道てん菜協会

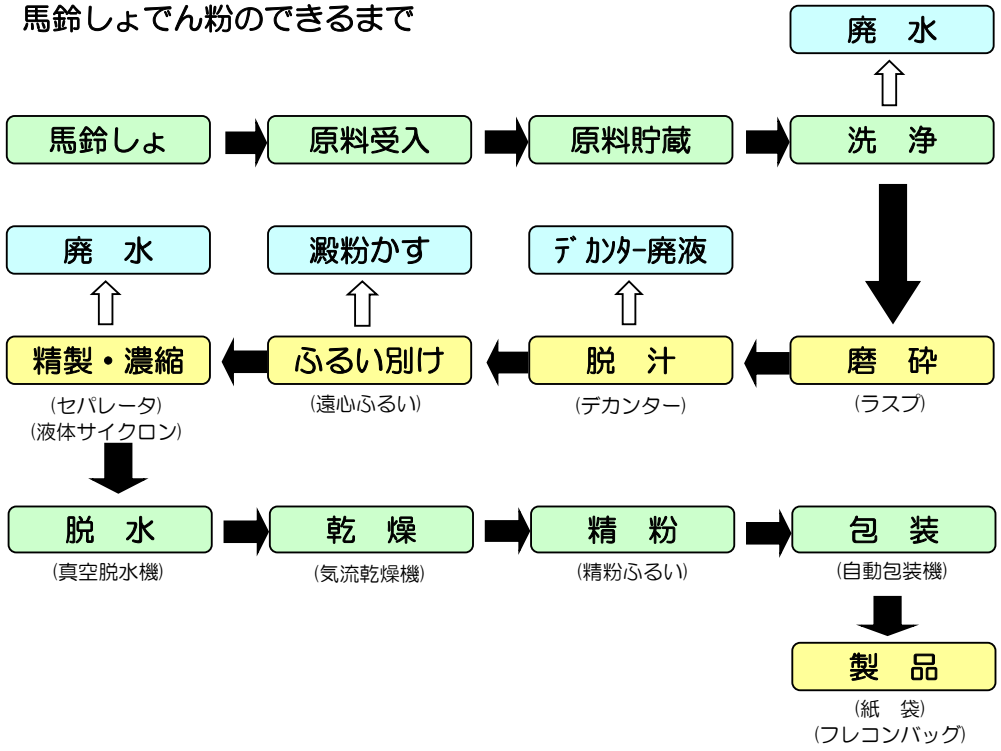
10　農畜産物の加工

10-2　馬鈴しょ加工

（１）でん粉原料用

管内のでん粉工場では、８月下旬から12月上旬の期間で、令和６年産では、約5万7千ｔのでん粉を生産している。

なお、でん粉工場は、平成11年と13年に製造コストの低減を図るため合理化、省力化に向けた再編整備を行い、２工場が廃業し、現在では農協系３工場と商系１工場の４工場が操業している。



（２）加工食品用

管内の馬鈴しょ生産量のうち令和６年産では30万9千ｔの原料が加工食品用に向けられており、加工メーカーに供給される工場を設置し、ポテトチップ、フレンチフライ、コロッケなどの製造を行っている。

ポテトチップ用には、トヨシロ、きたひめ、フレンチフライ用には、ホッカイコガネ、コロッケ用には、男爵いもが主に利用されている。

〇管内の主要な馬鈴しょ加工

・JA士幌
　ポテトチップ、フレンチフライ、コロッケ
・ジェイエイめむろフーズ㈱
　フレンチフライ、サラダ
・カルビーポテト㈱
　じゃがりこ、ジャガビー、マッシュポテト

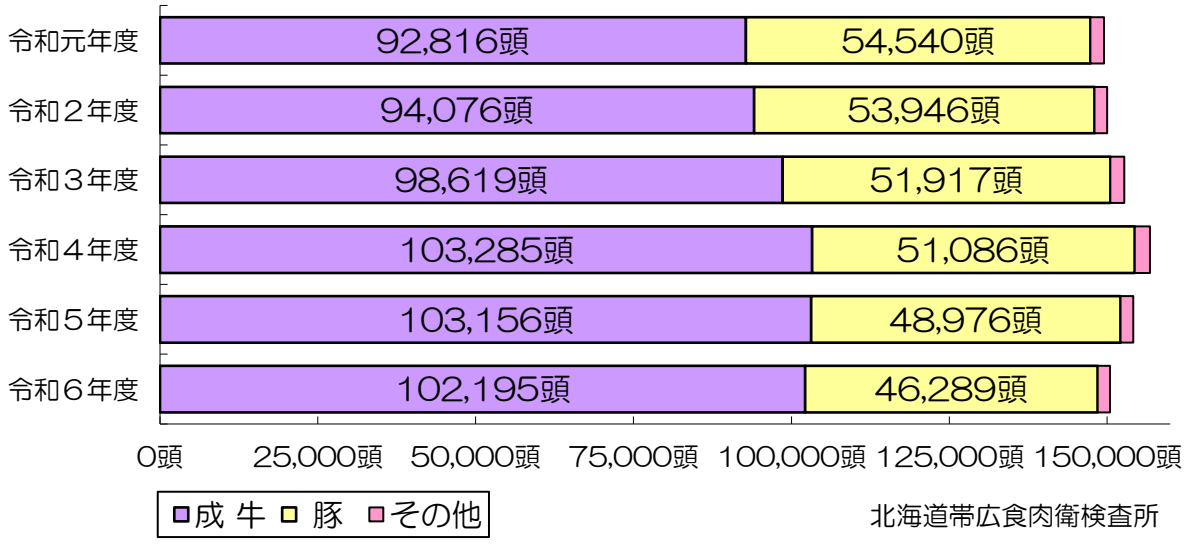
10 農畜産物の加工

10-3　食肉処理加工

株式会社北海道畜産公社十勝工場は昭和54年に設立され、現在は第１・第２及び第３工場を合わせて１日の最大処理能力は大動物（牛、馬）で450頭、小動物（豚、山羊、めん羊）では350頭である。特に牛の年間の処理頭数は、北海道全体の約42%、全国の約9%を占める国内有数のと畜場であり、十勝管内の畜産振興と食肉流通の基幹施設として重要な役割を担っている。

また、HACCPに基づく衛生管理体制のもと、安全で安心な高品質の食肉加工が実施されており、第3工場は令和元年度に米国向け輸出取扱施設、令和２年度にEU向け輸出食肉取扱施設として国から認定を受け、十勝産をはじめとする道内産牛肉の輸出の促進に貢献している。

〇株式会社北海道畜産公社十勝工場の処理等数の推移



北海道帯広食肉衛検査所

９　農業農村整備事業

９-１　農業農村整備

農業農村整備は、農業の生産基盤と農村の生活環境の整備を通じて、農業・農村の持続的発展、農村の振興を図り、「食」の安定供給の確保や農業・農村が有する多面的機能の発揮を目的とする取組である。

（１）農業農村整備の役割

十勝管内の農業は、農業産出額が耕種部門、畜産部門とも全道第１位となっており、北海道を代表する食料供給地域として重要な役割を果たすとともに地域を支える基幹産業となっている。

この農業生産の根幹を支えているのが、品種改良や栽培技術の向上と排水改良や客土などの土地改良を行う農業農村整備である。

管内の農業農村整備では、区画整理や暗きょ排水、水利施設や農道、草地畜産基盤など、農作物の収量の増加や品質の向上、農作業効率を改善させるための整備を地域の要望を踏まえて計画的に進めている。

■区画整理（くかくせいり）

大型の農業機械が効率よく作業できるように、農地の傾斜を緩和したり区画を大型化します。
これにより、農作業時間を大幅に短縮できます。

■暗きょ排水（あんきょはいすい）

畑の土中に管と透水性の高い砂利等を設置し、畑の余剰水を排除します。
これにより、作物の生育環境が改善され、収量・品質が向上します。また、畑の水はけが良くなることで、適期の農作業が可能となります。

■土層改良（どそうかいりょう）【客土（きゃくど）、石礫除去（せきれきじょきょ）】

畑に良質な土壌を投入したり石礫を除去することで作土の性質を改良します。
これにより、作物の収量増加や品質の向上、農作業効率の改善が図られます。

【客土】

【石礫除去】

９　農業農村整備事業

（２）農業農村整備事業の実施状況

管内の耕地面積の約５割は排水不良土壌であることから、明きょ排水や暗きょ排水などの排水改良を主体に、客土や除れきなどの土層改良や高品質で安定した農産物の生産をささえる畑地かんがい施設の導入を水利施設等保全高度化事業（畑地帯総合整備事業）等により実施している。

また、全耕地面積の約３割を占める牧草地については、飼料の自給率向上のため、草地畜産基盤整備事業等により実施している。

これらの生産基盤整備とあわせて、農業の近代化・合理化や農村環境の改善に資する農道、営農飲雑用水施設等を農村整備事業等により実施している。

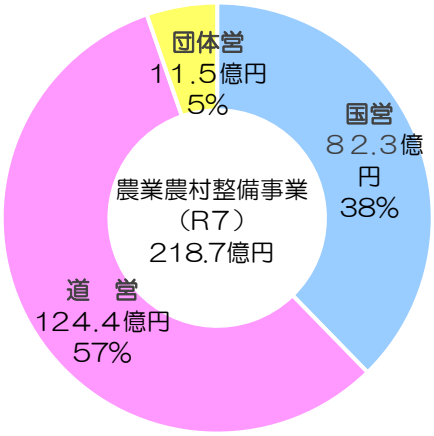
（３）農業農村整備の展開方向

農業農村整備は、「安全・安心で良質な「食」の生産をささえる」、「多様な担い手と地域をささえる」、「豊かな農村環境をささえる」の３つに重点化した取組を展開し、豊かな農村空間の創造を目指している。

農業農村整備事業予算の推移　（単位:百万円）

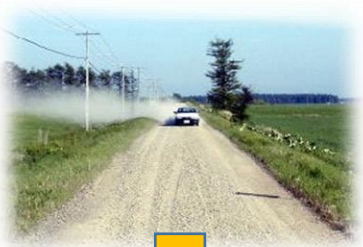
事業区分		R6年度予算	R7年度予算
国　営	かんがい排水	7,808	8,234
	小　　計	7,808	8,234
道　営	農地整備等	12,110	11,758
	水利施設整備	599	683
	小　　計	12,709	12,441
団体営	団体営農業農村整備	1,355	1,155
	小　　計	1,355	1,155
合　　計		21,872	21,830

前年度補正予算を含む。



■排水路整備

■草地畜産基盤整備

■畑地かんがい整備

■通作条件整備